

# 荒野をゆく

こもせたけとん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

EOEアフターモノです。

初めてエヴァンゲリオンの二次創作をしました。

Twitter上で公開していたものに少し手直したものです。

十数年ぶりに書いてみましたが何か心に残れば幸いです。

# 目次

荒野をゆく

道標

1

10



# 荒野をゆく

荒野をゆく

自分はまた、あの海の岸辺に居るのだ。

白い砂を握りしめ、時間も流れているかわからない程立ち尽くして居るのだ。  
ぼやけた空の色は藍色で星屑の流れゆく光線だけが時の動きを示す。

名前を繰り返し呼ぶ

名前を繰り返し呼ぶ

握っていた砂はいつの間にかサラサラと抜けて、拳の中の空間だけが喪失した物の名を知る。

夕暮れか夜明け前か解らない空色に赤い斜線。

大地には人が作りし物の残骸。

自分を守ってくれた女の子が作り物のように白い巨大な頭で、微笑みを形作ったまま

半分に分かれている。

海は赤く濁った生臭い羊水に満たされ白い砂浜に打ち寄せている。

波は赤いプラグスーツの少女を揺らし一波ごとに引きずり込んでいく。

少女はただ真上の空を見ている。

ユラリユラリと波に弄ばれて少女は海に浮かぶ。

それを少年は慌てて陸に戻す。

やっとアタシを見てくれたわね

少女は心の中で独り言ちると脇の下に腕を入れてウンウンと唸っている少年を見遣る。

少年が見られている事に気付くとウワツと驚き手を離す。

ドツサリと上半身を浜に落とされ痛くて堪らない。

お化けじゃないっちゅーの！

今、少女は感情を出せるほどの気力も体力もない。

首を絞められてそれを受け入れたら自分の仕出かした事に泣き叫ぶシンジ。

そして、脳内大反省会の思考ループに嵌まっているであろう頑なな猫背と丸い後頭部を見ていたら、全てがどうしても良くなったのだ。

自分が死ぬほど嫌いでどんなに存在を小さくしても独り。

そう人は独り、産まれるのも死ぬのも独り、死の向こう側に何も持つては行けはしない。

少年が気付かぬ内に波に攫われてもいいだろうと思つたのだ。

気付かない存在ならその程度なのだ。

彼女も少年と同じように思考をループさせ、更に甘き死に委ねる。

苦痛を伴わない死とはなんと甘美な誘いだろうか。

自己を失い彷徨う気持ちは無いと言うのに、決して溶け込まない意思と相反するの  
に。

投げ出されて気付いたのだ。

まだ必要とはされているのね

そして、フンツと鼻を鳴らしたため息をつく。

この蒼茫たる大地は焦土と化し、命と言えるモノは自分達二人きりなんだと本能が囁く。

再び隣に座り縮こまつてる背中を見遣る。

まったく二人なのに独りぼっちね

アタシとシンジはこれからも二人ぼっちなのよ

これからもずっと

僕は卑怯で臆病でずるくて弱虫で

隣で静かに横になっているアスカを見ることさえ出来ない

包帯だらけのプラグスーツは初めて見た綾波を思いだしたんだ

綾波は僕の願いを叶えようとした

人の形を失っても構わないほどに願ってくれたのに

それなのに

やっぱり僕は卑怯で臆病でずるくて弱虫で



拒否されるのが怖くて唯一の同級生で家族で初めて異性を意識したアスカの首を絞めた

アスカの身体に残る傷は自分が何もしなかったから

僕の罪の象徴であるモノを消し去りたかった

でも

でも

アスカは僕の頬に包帯だらけの手で撫でてくれて

ああ

やっと気付いたんだ

僕の望むモノが其処に在ったことに

そんな僕の行為でさえ受け入れてくれていることに

突然気付いて胸の奥から溢れる感情の激流に流されて

声にならない声が

震える身体が

自分の罪と願望が叶っていたことを知り打ち震える

下から冷ややかな視線と言葉を投げかけられる。

「気持ち悪い」

アスカにとって僕の全てを受け入れる事は当たり前であった事を本当の意味で知ったんだ

アスカもまた大切なモノを失い続けていたんだ

他人の望み通りのいい子供で在る様に強いられて

それも褒め言葉と死の恐怖を餌と鞭にして

死に物狂いで努力を強いられエヴァに居場所を求めて

死地へと向かう道程であつたとしても

それしなくては

そこまで努力する人は居ないからこそアスカの言葉は辛辣で

そして手にしたモノを失うのがとつても怖くて堪らなかつたんだ

僕とは違って欲しいものがあつても無理だからと拗ねたりはしない

手に入れるまで努力するんだ

そのアスカが自分を殺しかけた僕を受け入れる

赤い液体の底で聞いた

自我の境界線があやふやな世界で聞いた

アスカの本心を

僕達は似ていて違う

だからこそわかつたんだ

僕の罪を受け入れると言うことの意味を

アスカが取り乱して泣く僕を気持ち悪いと言った言葉の意味を

アスカの中では当たり前だったんだ

それを今更気付いて傷付けたと泣く僕に呆れていたんだ

アスカは僕しか要らないと言う事を

僕がやっと深く理解して心に刻んだ

そんな想いを赤い海を眺めて考えていた

アタシはこれからの事を考えていた

砂浜にいても包帯の間に砂が入るしプラグスーツがLCLで生臭い

鼻につくこの臭いは赤い海からもしてくる

生命のスープ

沢山の人間が溶け込んで自我を失い感情さえも一つになつてそれ自体が一つの大きな生き物でリリスの体液だった代物で腹水やリンパ液よりもドロドロしたもの…

式号機がなくなつた今は漬かる必要は無いし

関わりたくない

海から遠くへ行きたい

シャワーしたいしシャンプーと石鹸とパスタオルに着替えも欲しいわね

女という生物はリアリストなのだ。

生活していくために特化している。

子を生み育てる事とも関係している。

アスカはムクツと上半身を上げると隣のお地蔵になつて動かない人物の背に乗つた。  
ウワツと体育座りしていた少年が前につんのめる。

「…急に押さないでよ…」

「はいはい、さつアタシをおんぶしてゆつくり出来るところに行きましよ…ここにいたつてすることないんだから…」

しょうがないなあといった風情で少年はしっかりと少女を背負った。

「えつと……どこ行こうか……」

「そうね……本当に何が何だかわからないんだから、どこに行つてもいいじゃない……適当にゆつくり出来るところを探しましよ、あんたもアタシも砂だらけだしね」

少年はウンと返事をしてゆつくりと歩き始めた。

瓦礫だらけの果てしない景色。

後ろを向けば砂に一對の足跡。

少年と少女は荒野を目指す。

未来は二人だけが知っている。

## 道標

サクサクと乾いた音を立てて白い砂上を歩く、人肌の温もりを背負い、白いうねりは砂の海、下りは滑るようになりは這いずるように砂漠と砂礫の大地を進む。

下りの時は背負う紅き少女ががちりと後から腕と足で絡みつき落とされまいとしている。力の込めよう顔は見えないが様子はわかる。

その柔らかな四肢は裏切り続けた自分を包んでいるのだ。罪は許されてはいないだろうが頼られていると思うと安心する自分がいる。

今はそれだけでいい、死ぬまで無視されようが少女が望む事は叶えたいと願ってやまない。背中の重さは罪の重さではなく内側に閉じ籠もる自分を世界につなぎ止める重さ。

今はその重さが嬉しくもある。サラサラと流れる砂の様に形にならない不安よりも決意と想いは確実に少年の脚に力を与える。

砂丘の畝の天辺に立ち行き先を定める。果てしなく霞む水平線まで白い砂のうねりと合間に見える赤い水たまり、人類の痕跡も生物の姿も全く存在しない赤と白の世界が大地に拡がる。

いったい何処に行けば良いのだろうか、しかし少年は不安を振りかぶり考えても仕方ないと歩く、もう一人ではないと心に決めて歩く。

幾つかの砂山を乗り越え見た先に指さす人影、水色の髪、赤い瞳、制服姿の綾波レイが遙か彼方を指さしていた。

蒼茫の大地にほつねんと少女はいた。

「綾波レイ……」喉が枯れ喘鳴で言葉を紡いだ。

白いもので目の前を塞がれ一瞬で見えなくなる。

気付けばアスカの包帯だらけの右腕であった。

「あつちよ」彼女も同じ彼方を指さしている。

遙か彼方に崩壊したビル群の柱のような物が見える。

再び視線を綾波レイが経っていた場所に戻せば誰も居ない、砂丘の表面は何も痕跡を残しては居なかった。

鼓膜を揺らすのは流砂の音とうなじにかかる少女の吐息の音だけであった。

暫し呆然としながら歩み始める、指し示された場所への不安と先ほどの少女に対する忸怩たる思いが交錯し足が重くなる。

だが、生きるために往かねばならないそれは理解をしても尚、慚愧の念が失せることはない。それは人が背負う胸の内の枷。

枷があるほど人は逃げられない、そこで生活していく。ある者にとって家族であり、ある者は誠実なる生活にある。

守るもの大切な物が増えるほど逃げる意味など無くなり凍鶴の如く風雪に耐え忍ぶ強さを得ていくのだ。

腹の底から胆力が沸き一步一步と進む足は重くとも確実に前に進む力が産まれるのだった。

又一つの砂の畝を上がり下る、一つの畝が3〜5mある、砂丘のうねりよりは大きくなくとも砂は足を取り安定した場所がない。

遙か遠くの目指す場所からズレていく事に気付かぬままに進んでしまっていた。そして白い畝の頂点に立つと赤いジャケットを着た女性が遙か彼方を指さしていた。

「ミ、ミサトさんー」

側に駆け寄らんと急いで下るが足を取られて背負うアスカごと転げ落ちてしまう、薄く溜まった赤い水にバシヤリと二人は頭から飛び込んでしまった。

「うっ！くう…」アスカから息の詰まった声がる。

シンジは慌ててアスカの身体を起こすと顔をしかめて痛みを耐えていた。

「アスカ、ごめん…大丈夫？」

「…もういなくなつたわよ…ファーストと同じね…」ため息交じりに上を見る。



シンジもつられてみるとミサトであった人影は掻き消えていた。

「ミサトさんは……ミサトさんは最後に……うとうう……」膝をかきむしらんばかりに爪を立て鳴咽が漏れる。

「泣くのは後よ、教えてくれたんだから忘れない内にね」

「ん、うん、そうだよ、今は行かなきゃ……僕の背中に乗れる？」鼻にかかった声でアスカをおんぶする。

「んっ」アスカも鼻声で返事をした。

今は目の前の砂山を越えて目的地まで行かねばならない。赤い水を滴らせて旅は続く。

そこは今や最果て、人が暮らしていた断片が塩の柱とならずに残っている墓標であり、贅となった少年の起こしてしまった罪の痕跡でもあった。

門柱のようにビルの柱だった物が左右に立ち、近づくほど大きいものだとなった。

そこを越えると僅かばかりだが住宅のようなものが見えてきた。

どれも傾いで真っ直ぐな物は無い。

それを見てシンジは膝から崩れ落ちた。

失った物の大きさに慄き震えたのだ。

胸の奥より沸き立つ慟哭が虚空に響いた。

少女はただ小さくなった背中を見つめていた。  
碧眼に薄らと涙をにじませながら。